
月 刊

MéLange

Vol. 105



2015.08.15
第18回口ルカ詩祭
朗読(書き下ろし)作品特集

月刊「MéLange」

Vol.104 2015.08.15

「月刊めらぶっ」編集部

第18回ロルカ詩祭 朗読書き下ろし作品集

翻訳

フェデリコ・ガルシア・ロルカ「小便する群衆の眺め」……………鼓直 03

詩

生きた季節……………にしもとめぐみ 04

蛇の道／終点の借景……………千田草介 04

産声の風景……………安西佐有理 06

あーむすとろんぐ……………得平秀昌 08

じょじょう……………大橋愛由等 10

広場で言葉が一度死んでいた……………大西隆志 12

たそがれのぼしよ……………海埜今日子 13

悼歌……………富 哲世 14

連載エッセイ & 詩評

神戸詞あしび93「九州太宰府に毘盧遮那仏見に行く」……………大橋愛由等 16

編集部だより★26/8月は毎年「Mélange」例会は休みです。今月は「ロルカ詩祭」を神戸・三宮のスペイン料理カルメンで開催しました。今回で18回目を迎えます。第一部がロルカ詩の朗読。今年もスペイン語文学者の鼓直氏が、この詩祭のためにあたりにロルカの作品を翻訳して参加してくれました。そして第二部はロルカ的世界に身を委ねた自作詩の朗読です。今年、「Mélange」詩友である寺岡良信氏の追悼会のような様相となりました。朗読者も、それぞれに思いを込めて作品を読んだと思います。今号では、この自作詩作品のうち、わたしがセレクトしたものを掲載・紹介いたします。(大橋記)

小便する群衆の眺め

F・G・ロルカ
(バッテリー・プレイス夜想曲)

彼らは取り残されていた。
彼らは新型の自転車のスピードを待機していた。
彼女らは取り残されていた。
彼女らは日本の帆掛け舟の少年の死を期待していた。
彼らは 彼女らは取り残されて
夢見ていた、瀕死の小鳥たちのぼかんと開いたくちばしを。
千の耳を月の激しい攻めに
耐えている山道の
流れのおちよぼ口の
静寂のかけで、
踏み潰されたばかりのひきがえるに
突き刺さる鋭いパラソルを。
帆掛け舟の少年は泣き 多くの心臓がひび割れていった、
あらゆる物の証言と監視を苦にして。
不吉な痕跡をとどめた水色の地面で
陰気な名前 唾液 ニッケルのラジオがまだ 喚いているのを苦し
て。
止めのピンを突き立てられ 少年が沈黙していようとうでもいい。
綿の花冠のうへの微風の敗退などどうでもいい。

アーチの辺りに現れ 樹々の背後でお前たちを凍りつかせる
紛れもない水夫らが立つ 死の世界が存在するのだから。
夜がその旅を忘れる
通りの角を捜したり、
破れた服も 殻も 涙も
持たない沈黙を待つても意味がない、
蜘蛛のささやかなパーティだけでも
空ぜんたいのバランスを崩せるのだから。
日本の帆掛け舟の呻きには、
また街角でつまづくこのお忍びの者たちには打つ手がない。
野つばらは自分の尾つばをくわえ根っこを一点によせ集め、
糸玉は満されぬ長さへの欲望を 行儀芝の辺りに探る。
おお月よ！ 警官たち。外航船の汽笛よ！
小便の 煙のファサード、アネモネ、ゴム手袋、
すべてがテラスで股ひろげた
夜によつてぶち壊されている。
おお人々よ！ おお愛らしい女たちよ！ おお兵達たちよ！
眼のくらんだ穏やかなコブラたちが口笛を吹く野つばらを！
いとも新鮮なリングが成っている墓で溢れた光景を、
愚者どもの眼のなかを旅する必要があるのだろう。
虫眼鏡の奥の成金たちが怖れている
無際限の光線が、
あやめとねずみの二重の傾斜を持つ 唯一の肉体の臭いが訪れるに
は。
呻き声の回りや 決して繰り返さない波が含まれるガラス窓で
小便をしかねないこの連中が焼き捨てられるには。

◇ 生きた季節

にしもとめぐみ

舞い降りて
死の時を踊り
地に墜ちる
一度は死んだ葉
アスファルトに吹きだまり
風に寄せられると舞い上がる
好奇心の強いこども
風にあおられ
いつせいに車を おいかけたり
風の向きでは 妙におとなしくなってしまう
誘われて 集まって
はしゃぎまわる
暖かな陽を 葉色に含んで 生きた季節
軽い骸 さようなら
もう 魂だけで 生きられる

◇ 蛇の道

千田草介

ステッキに赤い色の蛇が
巻きついてきましてね
わたしも命の先が短いんでしょうか
蛇は鳴きません
じつと黙ってわたしを見ています
表情なんてありません
つまり感情もないのか
もしかして
わたしの身体のなかをめぐる管が
外に出てきたのでしょうか
あなたのなかに蛇がいるんですよと
なにかの聖典に
あるいは医学書に
記されていたとしても
ちつとも不思議ではありません
今まで
ずいぶんと邪なことを
考えたり
じつさいにやってしまった
白状しますと
それもこれも
太古以来の脳が

なせることではないか
われわれ
蛇の仲間から
そんなに進歩したわけではないと
だから蛇は
邪悪な智慧の謂として
忌み嫌われて
それでも一方で
聖なる者ともされて
空を飛び
地球を七巻き半して
あがめた種族に
生贄を要求し
ああそうか
わたしも生贄ということですか
もう冗舌は
やめて
黙ることにします

◇ 終点の借景

千田草介

くの字に折れ曲がった二本の鋼鉄
ここから先へは行けぬ
と示す錆びついた断面
その下に
酸化鉄の粉にまぶされた
焦げ茶色の碎石が
熱い陽を浴びて
夏草とともに
たちのぼらせる息
古い駅舎の横
便所の臭突から
出る香りと
混じり合って

いつのことだったか
三輪トラックの排気を
嗅いだときのように
頭の芯がしびれる
もう荷物扱いはしていない
引き込み線の跡に
花茎をのぼしかけた
咲く前の曼珠沙華
つぼみの中に秘されたのは
人体の中のもの
同じ色だろうか
むかし
散華という
言葉があった
原子番号26番
とおいとおいとおいむかし
星のなかでつくられた
鉄
の道
同じ物質が

血の色になり
それを散らして流すために
同じ物質で
道具が作られる
それを使うべく
若い男たちが
この道をたどって
出ていった
多くは
白い骸が
石ころになって
還った
列車はもうここまで来ないから
刃物の光を失った鉄条
その上を
錆色を保護色にして
コオロギが一匹歩く
おまえは生きているな
無事に生きているな

◇産声の風景

声のための Ver.2015.08.15

3

安西佐有理

1

こわれるために生まれたものが
その一瞬
とびだしていつて
こわれ

谷あいには 破片になって おちてゆく
きこえないざわめきが夕焼ける空
かすかに、あ、と息を呑む音がする

2

遠い山並みだけはじつとして動かないと信じられている
それは目の前の楠の木の葉がさかんに揺れているからにすぎない
そろそろ涼しくなってきた風が、カーテンをふくらませる頃だ

「ただいま」

鞆の重さを肩から床にどんと移す
腕時計の重さを手首からテーブルへごとりと移す
肌をはずして、そこに置く
骨をはずして、そこに置く
目玉をはずして、そこに置く
舌をはずして、そこに置く
そうしてやがて
注ぎ込まれた時間がゆきわたる血管をはずして、そこに置く

「行つてきます」

何よりも誰よりも長くわたしにふれていた肌
何よりも誰よりも長くわたしを支えて立ち上がらせた骨
何よりも誰よりも長くわたしを探した目玉
何よりも誰よりも長くわたしの口蓋の形と私の言葉を味わった舌
すべて置いて、焼きつくし
わたしは
かつて暮らしていたかもしれない街に出かけていった

「ただいま」

なつかしい異国の言葉も
畏れと歎びへの祈りの歌も
しずかな運河に魚が跳ねる水音も
とうに、わたしのものではない
さまざまな持ちものを置いて
わたしは語らせ、語られることば
わたしは歌わせ、歌われるうた
魚と音が波紋をつくる水面の意識に
変わろうとしていた

こののはじめから、この国にない
どこの国にも、ありはしない

「ただいま」

「行つてきます」
わたしは、生まれることを選び、帰り、出かけていく
(わたしたちは、生まれることを選び、帰り、出かけていく)

「行つてきます」

骨をあらいたちよ
骨をあつめ、人のかたちに戻すという
骨をあらいたちよ
あなたが聴く、美しく正しい骨の声は
旋律にならない、こわれた笛の音ほどにも
さみしさをまぎらすだろうか
聞こえない声に、沈黙の歯があつたのを見ていたか
その一本の骨は

そこにはない、あなたの骨
あなたやわたしのかけらを
拾いあつめる広野、捨てにいく山奥は

◆声のなかに苦悩はない、ただ歯があるだけだ

No hay dolor en la voz. Sólo existen los dientes
(フェデリコ・ガルシア・ロルカ「ニューヨークの首目のパノラマ」
Federico Garcia Lorca. "panorama ciego de Nueva York")

◆こゑはあれども絃管のこゑのごとし、げにも人は心がありてこそこゑ
はとにかくもつかはるれ。ただこゑの出づべき間の事はかりしたれば、
吹きそんじたる笛のごとし。(『撰集抄』巻第五)

◆列ね立てたる柱には、／『触るる者かく死すべし。』と／髑髏あり、ひ
たと黙める。(北原白秋「樟の合奏」)

◇ あーむすとりんぐ

得平秀昌

撰氏41・6度の あまりにここちよい夏の暑さに
スイカは真つ青 かき氷は凍りつき 風鈴は言葉を失って舌をたらし
て

この真昼 よじれた安物の掛け軸から寒山と拾得
箒片手にそつと抜け出す
犬ころになつて ころびつまるびつ まろびつころびつ

庭に咲く ねじ花のネジネジの螺旋を かけあがつたりかけおたり
そのうち 庭のまがきを越え さわぐるみの木々をゆすり
1万1匹の蟬と3匹のミミズを飲み込んで 山の頂あたりで

呵呵大笑 呵呵大笑
7時間30分の笑いの渦は地球を7周半回つて
千本の大木をなぎ倒し

シロナガスをサハラ砂漠に舞い上げて
千人の命を奪つた

あまりのことに 川辺でおきなおうなが泣いている
鹿の千兵衛も鳴いている
呵呵大笑 呵呵大笑

疲れ知らずの阿呆どもは 隣の美代ちゃんがおうちに帰つても
カラスがねぐらに向かつても どこにいったか帰つてこない
道に横たわるマムシは待ちくたびれて大きなあくびをする
毒牙のしずくは秋のいろ

見上げれば
卑弥呼の手鏡のお月様のしずしず空にうきあがる
しずしずしずのおだまきくりかえしむかしをいまになすよしもがな
????????!!!!

よくよく観ればあの寒山と拾得 お月様を掃いている
豪腕アームストロングの残した人類の偉大な足跡をきれいにかき消し
歯痛に悩んだテイラノザウルスのその瞳に映つた太古のお月様に掃き清
めている

箒にうち跨つて とんでいったのか
とんでもないそんな秘伎を 羊皮紙に描かれた
出つ歯のぎよる目のわし鼻の南蛮人の魔女から学んだのか

それとも 宅急便の女の子から?
夜な夜な抜け出ではキキと嬉々の逢瀬を重ねたな

もう疲れたろう
1万匹の蟬と3匹のミミズを吐き出して
蓬髪のまま 土足のままでいいから早く帰つておいで
草葺の家を建て 茄子や胡瓜が夏中食べられるよう畑もつくつておくから
君たちの好きな瓜もつくつておこう。

いやゝ この寒山拾得図なかなかよろしいな
前見たときよりお顔がよくなりました とくわせものの山本タカユキ氏
ところでこの足跡のようなものはなんですか?
1匹の蟬が鳴きだした

あーむすとりんぐあーむすとりんぐあーむすとりんぐあーむすとりんぐ

2015年
8月15日

第18回

ロルカ詩祭

〈出演者〉

ゲスト詩人/
海荃今日子
飛火野 椿
演奏/
春間げん

アグスティン、安西佐有理、
得平秀昌、大西隆志、大橋愛
由等、黒田ナオ、今野和代、
千田草介、高谷和幸、鼓直、
富 哲世、にしもとめぐみ、
福田知子

〈詩祭スケジュール〉

8月15日(土)午後5時 開場

「1部」17PM30分～19PM00

ロルカ詩の朗読

「2部」19PM10分～19PM30

詩人たちの自作詩朗読

〈場所〉スペイン料理カルメン神戸市中央区北長狭通1-

7-1 電話078-3331-2228 6500012

JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分

〈料金〉A3600円(チャージ込み)夏の特選ス

ーフ(2)季節のサラダ(3)メインディッシュ

(4)バエリア(5)コーヒー(6)デザート

B2000円(チャージ込み)ワンドリンク(選択可)

(2)スペイン産チヨリソ

〈特典〉当日参加者の方全員に、第二部参加の詩人た

ちが朗読する詩作品掲載の「八月一九日詩集・

Vol.18」を進呈します。

進めるドゥエンテの場「第18回ロルカ詩祭」へ

今野和代

見ていたい。こどもがオレンジの実を食べるのを、農夫たちが麦を刈り取るのを。だから「わたしが死んでも露台(バルコニー)は開いたままにしておいて」。そんな「別れ」の詩のフレーズを書いたロルカ。アンダルシアですら滅びかけていたヒターノによる土着のフラメンコを愛し、奔走して蘇らせたロルカ。詩人で朗読家、脚本家で演出家、作曲家で演奏者、絵を描く人でもあった。自らを「アナキスト、コミュニスト、自由主義者で、カトリック、伝統主義者、王政主義者」と語った。38歳の彼は、スペイン内戦のさなか1936年8月19日から20日未明かけてのグラナダ郊外ヴィスナルのオリーブ畑で、フランヘ党により銃殺された。フェアリコ・ガルシア・ロルカへの敬愛と哀悼、阪神・淡路大震災で犠牲となられた人々への鎮魂と復興へのおもいを込めて1998年より神戸の地で「ロルカ詩祭」が開始され、今年で18回を迎える。広島・長崎の原爆投下そしてアジア太平洋戦争終結から、きっかり70年。阪神・淡路大震災から20年。東日本大震災から4年。ネパール大震災から4カ月。星座と海の詩人寺岡良信を失って2カ月の夏でもある。戦争と震災と死の脅威と無惨と空白は、今なお私たちを襲い苛み、深い喪失感と悲しみの底に突き落とす。2015年8月15日。「ただなか」という一人ひとりの切実な現実を抱えながら、会場となる老舗「カルメン」での詩祭には、出会いと戦慄、声と音楽、沈黙と発語と身体とスピリッツによる、名づけることのできない新鮮な時間が流れるだろう。ロルカが「靈感の瞬間的な噴出、真に生命あるものの紅潮。演者がある瞬間に創りだす全てのもの」と言った「ドゥエンテ」の場が出現するはずだ。マルケス「百年の孤独」、ボルヘス「伝奇集」翻訳者の鼓直氏のご出演を今年も得た。東京から海荃今日子さんと飛火野 椿さんをお招きする。どうかみなさま、ふるってご参加ください。

吟じられるのは
抒情
鎮魂
あるいは
沈黙

スペイン料理
カルメン

神戸市中央区北長狭通1丁目7-1

078-331-2228



http://carmen-kobe.com

◇ じょじょう

大橋愛由等

あなたを追うのは
逸楽の蝶
新月の蔭
真鍮まねの眼
亜麻色の刺

いくら 高らかに
パルマを 響かせても、
漆黒の

あまたの香草を目覚めさせた
ファルダを そつげなく
ひるがえして、

オレンジ畑の
朝ぼらけの

葉のそよぎほど、
豊かな黒髪をなでた

午後二時の
微風の思い出ほど、
―としてしか

乾いた大地に
風をしばった

少女の泪の分量の
アグアをまき

この街に この街の
いつもの角の いつもの更地で
かたりあう石たちは
いずれみずからを包む綿布を
運んでくるのは あなたかもしれない
なとど夜明け前から
繰り返し くりかえす
その声は
きつとバルコーンにいる
ひとびとにも聴こえている
にちがいない だろう

楽しみだつて？
背後から大きく開いたその背に
かたりかけた八月の朝も、
空のくぼみにむかい

コップ一杯のオルホを
ソネットで翻訳した新作をささげてみたい
その月曜日でさえ、
暗渠をまたいで吹いてくる
風のすきまから産まれる
〈じょじょう〉の片言も
聴こえてこない
―かなしい

のこしたもの のこつたもの のこされたもの
なんて
ナプキンに書きつけた末稿と
座りつづけたモロッコ皮製の椅子
食べられることを拒んだ蜂蜜入り林檎
カーニヤの渦ははてなく自転しつづけ
湾のかなたからつづく
港町の夏の海に反射しているのは
〈じょじょう〉の束 だった

閑か といえよそれまで
月光のなすがままに といえよ許されようか
絹のハンカチーフを持っていれば
無花果をふたつ持参すれば
白桃をかか詩人にむかつて投げつけるのであれば
そして

〈小夜曲〉を
日にみたび 頬を紅潮させ
楽しみに満ちて ひとしれず
口ずさんでくれれば

朝な 夕なの
きれぎれの うれいばかりの
黙示を
こすつてはかさね
破りきつて、

あなた好みの
句読点が忘失した
異教徒の呪言を唱えながら
ためらいが復唱される
小鳥たちの唄を
夜の聖者のごとく聴く―

蟬たちの嘆きだつて
嘆きのままに そのままに
分かれの刻の分岐をめざし
横転しているのか
自縛しているのか
一本の蝙蝠傘も 用意されない
その家のファサードには
たちつくす詩人たち
の 點に捧げる

殉教者めいた
言辞がかわされ
次は―とだれかが
言い出すのをおそれ
つくりわらいをかわす昼下がり

楽しみだつて？
背後から大きく開いたその背に
かたりかけた八月の朝も、
空のくぼみにむかい

この街に この街の
いつもの角の いつもの更地で
かたりあう石たちは
いずれみずからを包む綿布を
運んでくるのは あなたかもしれない
なとど夜明け前から
繰り返し くりかえす
その声は
きつとバルコーンにいる
ひとびとにも聴こえている
にちがいない だろう

そして

ひとびとの中に
はにかみながら 思わせぶりの詩句を書きながら
横座りをしているそのひとがいることを
見逃さない

ねえロルカさん
バルコーンから
ひまわり畑と 逸楽の蝶と さえない月光は
見えますか
真鍮の眼を 柔化させるのは
〈じょじょう〉ですか
ねえロルカさん
ぼくたちは

〈じょじょう〉なしでは生きていけないの
でもそれは美味しいもの
亜麻色の刺の痛みの果てかしら
ロルカさん―

◇ 広場で言葉が一度死んでいた

大西隆志

ヒトが行き交うとき
マチが顔を出す
どこに急いでいるのか
羽根をはやせもしないタロウやハナコたちも
飾り付けられた偽名で早足に沈んでいく
通路の横の広場には夕日があらわれ
少しの風が襟を撫でていく
ぼくらはセイジくんに連なる思いを言葉に
していた
時の権力者が言葉を貶めていることへのピツ
チャー返しで
落首なる一言も
相手にあわせてしまいアンダースローの糞だ
らけ

糞を地名にもつているから
言葉がはじまるのだった
泥んこの地に雑草の一本の茎
掻き回した場所を整列するのは
麗しき青年団や一糸乱れず進むオオヤケさん
白痴の風が花束のギターを抱えた長い髪を撫
でていく
恋人たちの脇を公序良俗か通り過ぎる
暑いのに、いややね、ネーサンが眼から光線
を出している
わたしはロボットになり切れてないのかしら
優秀なわたしては憂鬱な顔を化粧で隠して
業務遂行、大好きな彼のために
セイジくんが通り過ぎる
黙りこくった背中には暮らしが貼り付いてい
る

時給が通り過ぎる
言葉を推敲していたら、折角のチャンスは逃
げていく
止めてください、気分が悪い催し物
彼の悪口言わんとして、名指しやめて、個人攻
撃ですよ
時の権力者に失礼な

彼は進めと言っているのに
わたしはほうれんそう、を守るヒトなの
止めてくれたのに、通りのヒトがわたしに迫る
年寄りが多いよう
言葉がわからない、彼らは外国人なの
戦争体験者だという、弾圧って言葉は外国のこ
と

ガイコツが蘇ったよう
死んだヒトの言葉が何度も殺され
広場は言葉の帳に包まれている
電飾のチカチカにも包まれて
勤める先の仮面をまだ外せないでいる
わたしを見つめるぼくら
ぼくらは民主主義くんなのだ
呑み屋で野暮はセイジくんの話だが
セイジくんはたまにはダッシュしてかけよっ
てくる

生殺与奪ってセイジくんが握っているもの
日が沈みかけた広場で
泥んこの地に一本の雑草が
名もない雑草の歌が
低く鳴り響いているようだ

◇ たそがれのぼしよ

海埜今日子

かわほりさん。はいけい、こくはくします。と、いとしいすきま
がそらをさした。きしべだったかもしれない。ささくれのような
ゆくえ、きれぎれになり、わたしをみたようなきがするのです。か
わたれさんに、にてますね、ごきげんよう。らくじつのなか、う
ずくまつて、ちじょうをみあげたものでした。ふるいつきをうか
べてみます。すいめんがのぞくので、へんしんとして、さしだそ
うとおもいます。

ぼしよのしょもつ。たくさんのえだが、かわもにうつり、そらを
およいでは、つきをさすつていのでした。げんじつがわたされ、
いんえいをほどいては、たむけています。とどまりかたが、なつか
しげで、しんじられるほどにすれちがって。ねんねんころり、き
せきのむくろに、そつといきてみたかつたと、どうしようとして
ページをおつた。やぶけたゆうやみ、どこか、だれか、ここでも
さびしい。

こうもりさん。おうまがときの、ざわつくししやさん。したのね
を、ふれたくつて、ことばのうらから、よびたくなつて。おくつ
たなまえが、かわほりさん、いさびびみたいに、ぼつと、とおく、
ちかくをね。なんどもそよぎ、かわいたしぶき。さすらつて、み
えなくなつたすいめんは、ぜつたいにげんじつをおよいだので
す。つきのしずく、すくうように、はねのついたねずみさん、ま
たかわろうね。

しみこむまぎわの、あかいみず。あちらのやみをしのばせ、わた

しをずっとぬれないでいて。しょもつのぼしよを、げんじつにか
さねる。うつたページ、めくつたそれ、どちらのそらであつた
のだろう。おうまがとき、と、こえをしぼり、くちづけのように
ひらいてみる。なら、いつかのこもりうた、もうちつとも、おほ
えちやいないから、かさぶたに、きつと、なつたのかしら。どち
らにしても、いたまなければゆけないの。
こうもりさん。とじないまなうらの、さかじめによせて、ますま
すいんえいをにぎりしめ、なみうつつき、もぐるうと。わたしを
みかけるもじをうつる。あおいみず、ひこうにあび、ひるのきれ
はしの、げんそうのよう、たどりつきたい、すいめんわかれて。む
くろをねつく、さけめもあるから、なんとしてもそそいだのです。
こんばんは、の、まえに、かわほりさんへ。たそがれふくんで、だ
れのかわをやさしかつた。

ぼしよへしょもつの。ページをひたし、おもい、かわされ、つき
をすくうように、みずにともつたあかり、うれしい。えだだつた
か、みずのくさ、つまり、かれ、あやめもわかず、あしもとをあ
おぎ、わたしはそうして、にちじょうをさしかかるだろう。だれ
を、あるいは、にくをもつた、ゆうやけによせ、なおつてね。つ
づるちゅうとで、やみを、はしへ。だからこそ、ささめきによせ
て、こもりうたをおきるのだ。

かわほりさん。ほんとうにつけた、ねずみのはね。おいかけたの
で、まつかなきさくれの、はさまにひたして。だれですか、ま
ちがえないように、へんじをたぐり、なんてあおき、とびかた、あ
らたなつき、かかげましよう。おりたつそらに、ゆめゆめ、いつ
づけては。なら、かれへ、またあした。したたるようなひつせき
なので、ちゅうかんにて、むくろをいきようとおもいました。こ
うもりさん。つちいろのひしょうがたよりです。

◇ 悼歌

富哲世

(一)

風が吹いて
 きようわたしはもう見ることはない
 どんな夢を見たのだろうか
 夕暮れの隔たりを通して
 夜の鼓笛隊がまた聴こえる
 天使の到着のあとの
 眼差しをすずしくはずして
 穴のような
 真つ暗な花の覗く
 庭の片隅に宿る遠いささやきに

耳当てている
 水平線の間にであう
 煽るような
 空と波との戯れを測りながら
 歌でしかない怒りと
 引き潮のやさしさに
 濡れ打つ水音を数えている
 熱い烙印
 闇の胸
 星座は微笑みのように
 樹間に充ちているよ
 どんな光の下を
 ぼくらは歩いていたのか
 やあ、もう問う者はいません
 失くしたものをみつけた
 あの夏はもう

(二)

転回とは、あるものの死を堪え忍びつつ、それをみずからのうちに保持することであるかのようだ。そして新たな秘密の経験を開始し、秘儀を分かち合うこととして責任の新たな構造を切り開こうとするとき、ひとがみずからのうちに保持するものは、埋め込まれた記憶であり、より古い秘密のクリプトなのだ。(ジャック・デリダ)

死はぼくらへのご褒美なんだって。上述は責任の系譜学についてデリダの一節。それが暗合させてくれている死との出会い、それは死に常に先立たれたわたしたちのだけれども、試みようとするところでもある。寺岡さん、いま尽きず、響り高く流れる小川の水のような、貴方の所望したというエンディングテーマ、バツハの無伴奏チェロ組曲をかけています。チェロの音色はほんまに人の声のひびきやね。それは貴方が人を愛したという最後の証し、のようなものだろうか。旅人かへらず、や寺岡さん。もしかしたらもうそつちで、美しい、悲しい詩をぼくらに遺してくれた詩人のひとりとして、貴方の好きな立原や三好や西脇順三郎せんせいらの談笑の輪のなかにいるのかもしれないね。それとも新入りとしてバトリソンの美声か、ハーモニカやリコーダーでも披露しているのかな。

愛しいねえ。
 悔恨の衣裳を脱ぎ捨てた今、あなたの詩のなかには何がいたか。あなたが建てた海に向かう彫像の前で、それはそこから苦しみと、憧れのやつて来る、海につながれ、星の開けにつながれた、どこにでもいる、愛すべきわたしたち自身の無邪気な姿にほかなりません。

トウオネラの河水はあなたの詩のように、深く青く澄んでおりますか、あなたの白鳥は解き放たれて川面に舞い降り、美の羽を志塚に畳んで一期をやすらいでいます。わたしたちは結びの一行を空白に置いたまま、悠久の時と、あなたの終わらない詩に委ねることにいたします。

九州大宰府に毘盧 遮那仏を見に行く

わたしは仏像マニアではない。仏像は単なる唯物的な彫像だと思っているからだ。仏像の背景の仏教思想こそが重要なのである。

こんなわたしでも、唯一気になる仏像がある。毘盧遮那仏である。奈良・東大寺の大仏がとびぬけて有名である。しかしこの他にこの仏は国内に数えるほどしか存在しないという事実がある（唐招提寺にもある）。

どうしてこんなに少ないのだろうか。観音菩薩像なら、現代でも造り続けられ一〇メートルを超える巨大な像も存在することと比べれば、毘盧遮那仏はこの列島民の信仰の対象とならなかつたと考えていいのだろうか。

それは華嚴宗という東大寺を頂点にいたたく宗派の勢いと関係しているのかもしれない。平成六年（1994）にお

ける同宗の寺院は144。信者数は44500人と決して多くない。つまり華嚴宗の寺勢がそのまま毘盧遮那仏の教に影響しているのかもしれない。

華嚴宗は南都六宗のひとつという悠久の歴史をほこる宗派でありながら、鎌倉時代における仏教ルネッサンスの時代において、民衆に語りかける救済のコトバを発することなく、ほそぼそと千年以上、法灯を守り、華嚴学の研究だけは連綿と積み重ねてきた学問的な宗派であることも関係しているだろう。

華嚴は宗教というより、哲学として魅力がある。学生時代から華嚴に関する著作は読んできたし、現在では、井筒俊彦の読み直しがわたしをひきつける。

さてその毘盧遮那仏（上写真）をもとめて今月、九州・太宰府まで足を伸ばした。平安時代末期の作で重要文化財に指定されている。それは戒壇院という寺院にあった。創建は753年。ここは、「出家者が正式の僧尼となるために必要な戒律を授けるために設置された施設」である。つまり当時の僧尼になるためには国家資格（授戒）が必要なのであり、合格すれば国家公務員として身分が保証されていた。

その戒壇院、いまでは禪宗の臨濟宗の寺となっている。日曜日には毘盧遮那仏が収まった本堂にて座禪を行っているという。なんとも羨ましい話である。

毘盧遮那仏をしばらくみつめた後、社務所に顔を出した。住職と語ることができた。神戸出身だそうで、長々と語りあったのである。

なぜわたしは毘盧遮那仏をもとめて九州まで来たのだろうか。毘盧遮那仏を見ることが、華嚴思想の理解に役立つのだろうか。釈迦を、全存在を、包摂し、すべてを肯定するこの法身即宇宙仏を私は理解しているのだろうか。彼の語りかけるコトバを理解し、近づけるのだろうか。ただまばゆいばかりの彼のどこまでも届く光を受容することでさえ、自覚しないままに終わってしまうのかもしれない。



詩と評論

月刊「Mélange」Vol.105

神戸

2015年08月15日 通巻105号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等（「Mélange」同人）

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税込)